

平成29年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成29年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

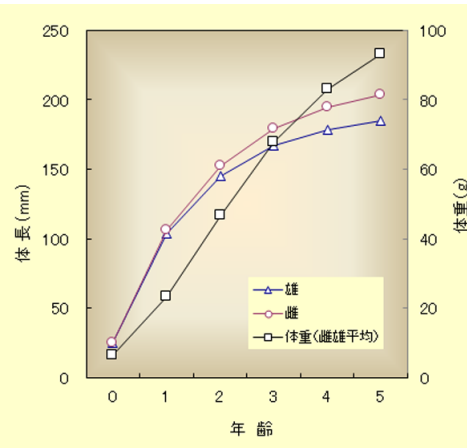
系群名 日本海西部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 5歳（年齢および年級は、ふ化した年を生まれ年とし1月1日に加齢するとして表記）
成熟開始年齢： 雄：1歳（50%）、2歳（100%）、雌：2歳（100%）
産卵期・産卵場： 12月、秋田県沿岸、朝鮮半島東岸
食性： 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者： マダラ、アカガレイ

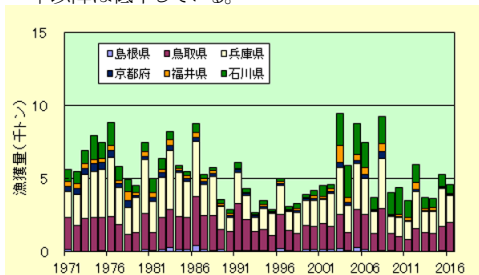


漁業の特徴

本系群は能登半島以西の日本海西部に分布し漁獲対象となるものであり、兵庫県と鳥取県では沖合底びき網1そうびき(以下、沖底)、石川県～京都府および島根県では小型底びき網によって主に漁獲される。漁期の中心は3～5月である。なお、2009年以降、水揚げ量の制限や網目拡大などの自主的な取り組みが実施され、1歳魚が水揚げされにくくなるとともに、1歳魚が多く混じると水揚げ自体が控えられている。

漁獲の動向

漁獲量は、1970年代から1980年代半ばに多く、1990年代前半は少なかった。その後増加し、2003年に過去最高となるも1～2年での半減倍増を繰り返した。2009年からは4,000トン前後で推移し、2016年は4,601トンであった。府県別では、2002年までは兵庫県と鳥取県で7～9割を占めていた。2003年から石川県の割合が上昇したものの、2014年以降は低下している。

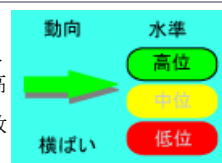


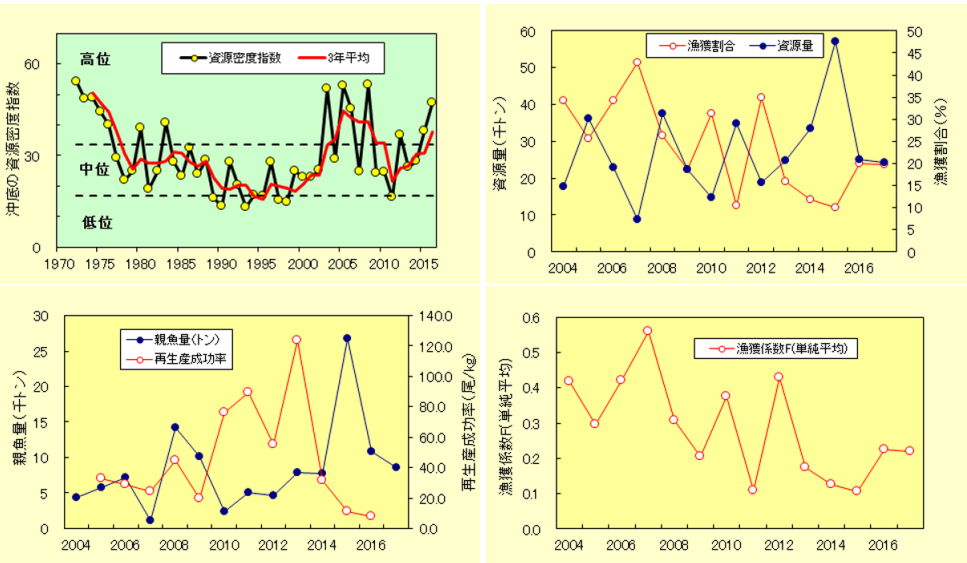
資源評価法

1972年以降の沖底の資源密度指数に基づき資源水準を判断した。その際、本種特有の数年ごとの半減・倍増の影響を取り除く目的で、3年の平均値(当年、前年、前々年の平均)を用いた。また、動向は、トロール調査結果から面積密度法を用いて推定した資源量により判断した。

資源状態

資源量は9,000～5.7万トンまで大きく変動しており、2017年の資源量は2.4万トンであった。親魚量については1,159～2.7万トンで推移し、2017年の親魚量は8,524トンであった。資源水準は、資源密度指数の3年平均の最高値(50.6)を3等分し、高位と中位の境を33.7、中位と低位の境を16.9とし、2017年の資源水準は高位と判断された。資源水準が高位となった理由は、2013年級の豊度が高かったためと推察される。資源動向については、資源量の直近5年(2013～2017年)の推移から横ばいと判断された。近年、資源密度指数は上昇している一方で、資源量は横ばいに推移している。このような推移の違いは、2009年に始まった1歳魚保護の取り組みによるものと推察される。





管理方策

現状の漁獲圧を維持しながら、資源を有効利用することを管理目標として、2018年ABCを算定した。現状の漁獲圧 (Fcurrent=0.18) はFmed (0.17) よりわずかに高いが、2022年まで資源量は維持される。また、1歳魚を保護して2歳以上になってから漁獲する方が経済効率は高くなることから、今後も網目拡大の取り組みは続け、経済効率の高い2歳魚主体に漁獲することが重要である。

管理基準	Target/Limit	2018年ABC (百トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
Fcurrent	Target	33	14	0.15 (-20%)
	Limit	40	17	0.18 (±0%)

- ABC 算定規則の1-3)-(1)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値による漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の維持が期待されるF値による漁獲量
- Ftarget = α Flimitとし、係数 α には標準値0.8を用いた
- Flimitは現状の漁獲係数 (Fcurrent)
- Fcurrentは2015～2017年のFの平均値
- 漁獲割合は2018年のABC／資源量
- ABCは十の位を四捨五入した
- 2017年以降の加入量は、2005年以降の再生産成功率中央値を使用して予測した
- F値は単純平均

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は横ばい
- 水準は資源密度指数の3年平均で判断した
- 動向は資源量で判断し、2017年は2.4万トンであった
- 2017年親魚量は、8,524トンであった

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧を維持しながら資源を有効利用することを管理目標として、2018年ABCを算定した
- 現状の漁獲圧で資源量は維持される
- 今後も網目拡大の取り組みは続け、経済効率の高い2歳魚主体に漁獲することが重要である

執筆者: 藤原邦浩・上田祐司・佐久間啓・吉川 茜・松倉隆一・山本岳男・山田達哉

資源評価は毎年更新されます。